

聖書：創世記 33：1～20

説教題：エサウとの和解

日時：2024年3月24日（朝拝）

いよいよ兄エサウに会う場面が今日の章に記されます。ヤコブは20年前に兄の祝福を横取りし、このためにエサウはヤコブを殺すと決意しました。そのことを知った母は兄さんの怒りが収まるまで！と遠い自分の生まれ故郷パダン・アラムへヤコブを逃がしました。その期間が20年もの長期に及ぶとは母リベカもヤコブも思っていなかったことでしょう。この間、ヤコブは人をだましたように自分もだまされるという苦しい期間を過ごしました。しかしヤコブはアブラハムへの神の約束を継承する者として約束の地カナンに戻って生活しなければなりません。神からもそうするようにと命令がありました。それで彼は戻って来ました。そしていよいよ明日エサウと会うという前日の夜、前回見た神と格闘する出来事がありました。ヤコブはももの関節を打たれて足を引きずる者となり、そうして初めて真に神の恵みにより頼む者とされました。この日の朝、足を引きずる彼の上に太陽が昇っていました。神の祝福が彼の上にあります。兄と会うための準備は神によって完了します。そしていよいよ兄と会う場面が記されます。

1節に「ヤコブが目を上げて見ると、見よ、エサウがやって来た」とあります。彼は400人の者を引き連れていました。ヤコブはどうしたのでしょうか。彼は自分の群れをレアとラケルと二人の女奴隷の群れに分けます。まず女奴隷たちとその子どもたちを先頭に、次にレアとその子どもたちをその後に、そして一番後ろにラケルとヨセフを置きました。明らかに大事な者たちを後ろに置いたということです。もし攻撃されても大事な者たちは助かる確率が高くなるようにと。こんなところにヤコブのこれまでの性質はそのまま残っていることが示されています。

しかし彼の新しく変わった面もあります。それは彼自らが先頭に立って進んだことです。彼はすでにエサウが400人を連れて向かって来ていることを知っていました。それを知った最初の時是非常に恐れて心配しました。そのため昨日は安心して休むことができず、その延長に神との格闘がありました。しかしこの日の彼は違いました。前の晩の神との格闘を経てヤコブは神に信頼し、神にお委ねして、自らが行列の先頭に立って進み、兄に近づくまで7回地にひれ伏しました。過去の自分の罪を悔い改め

ている者として、心からお詫びする者として、彼はそうしました。するとどうだったでしょうか。

4 節で兄エサウが走って来ます。何と彼は弟ヤコブを抱きしめ、首に抱きついて口づけしました。そして「二人は泣いた」と記されます。余計な言葉は不要なほどの感動的なシーンです。兄エサウは危害を加えるどころか、受け入れてくれました。なぜそうしたのでしょうか。あれから 20 年もの時が経過したからでしょうか。あるいは 7 回も地にひれ伏して近づく弟を見て心が和らいだからでしょうか。あるいはエサウがもともと持っていたおおらかな性格ゆえでしょうか。おそらくこのいずれもが関係していたと思います。それにしてもこれを読んで何かを思い出さないでしょうか。それはイエス様が語られた放蕩息子のたとえの父の姿です。あの父も走り寄り、抱き、口づけしました。イエス様があのたとえを語る際、このエサウを思い出していたのでは？と思うほど、良く似ています。

エサウは目を上げ、ヤコブとともにいる者たちについて尋ねます。ヤコブは「神があなた様のしもべに恵んでくださった子どもたちです」と言います。そして女奴隷とその子どもたち、次にレアとその子どもたち、最後にラケルとその子ヨセフが順番に進み出てひれ伏しました。こうしてエサウに家族を紹介することができました。また先立って遣わした贈り物についてもエサウは問います。ヤコブは「あなた様のご好意を得るためのものです」と答えます。エサウは「私には十分ある。弟よ、あなたのは、あなたのものにしておきなさい」と言いましたが、ヤコブは強く勧めます。これは彼のお詫びの気持ちの現れであり、またエサウとの和解を確かなものになりたいという願いからのものだったでしょう。ヤコブがしきりに勧めるため、エサウはそれを受け取ります。こうして両者の和解は確かなものとなりました。

これは神の恵みによる奇跡です。神がヤコブの状況と彼の心を整え、またエサウの状況と彼の心を整えて、このような願わしい結果を導かれました。またこのヤコブの姿には神の恵みが特別に現れています。二人の兄弟の和解の記事を読んで私たちは安堵し、喜ばしく思いますが、同時に二人の違いも鮮明にここに現れています。ヤコブは兄に対する言葉の中で繰り返し、神に言及しています。5 節で、ともにいる者たちについて問われた時、ヤコブは「神が・・・恵んでくださった子どもたちです」と述べ、神の恵みを讃えました。11 節も同様です。彼は「神が私を恵んでくださったので、

私はすべてのものを持っています」と言って、神への感謝を表しました。また 10 節で兄に受け入れられた時、「私は兄上のお顔を見て、神の御顔を見ているようです」と述べ、エサウとの和解の背後に神の存在と導きを見て、そのように表現しました。このように彼は今の自分の生活を成り立たせ、導いてくださったのは神だと述べ、神を中心にすべてのことを見えています。それに対してエサウはどうでしょう。彼の言葉には神への言及が一切ありません。9 節で彼は「私には十分ある。弟よ」と言うだけで、そこに神のおかげでという考えはありません。今日の箇所ではエサウはいい人であるように描かれています。弟の罪を赦し、弟を受け入れ、自分としては不要なのに弟がしきりに勧めるので折れて贈り物を受け入れる。ヤコブよりも器が大きい、好感を持たれる人だったかもしれません。しかし彼は神なしで私は生きているし、これからも生きて行けると思っている人です。人間的な意味では魅力ある人ですが、決定的なものを欠いていると言わざるを得ません。神への思い、神への感謝、神への信仰はありません。その一方、ヤコブの神の恵みにすぎり、神に感謝し、神に栄光を帰す姿は際立っています。時間はかかりましたが、ここに兄とは対照的に信仰の人、霊の人、恵みの人として整えられているヤコブの姿を私たちは見るのです。

さて、この前半部分まではそれほど問題なく読めるのですが、後半部分を読むと色々疑問も湧いて来ます。12 節でエサウは「さあ、旅を続けて行こう」と言って、ヤコブを自分のところで一緒に住もうと招きます。どこまで彼は良い人なのかと驚きません。しかしヤコブはこの誘いを辞退します。彼ははっきりとはそう言いません。自分たちは疲れているから先に行ってください。私たちは後からゆっくり行きますと言います。そこでエサウは、それなら何人かをあなたのもとに残しておこうと言ってくれますが、ヤコブは「いえいえ、とんでもないことです」と言って断ります。こうしてエサウはその日、自分の土地セイルへ帰って行きました。するとヤコブはどうしたのでしょうか。17 節に、「ヤコブはスコテへ移動し、そこで自分のために家を建て」とあります。彼はセイルに向かうのではなかったのでしょうか。それはウソだったのでしょうか。

確かにエサウと一緒に行かなかったことは判断として正しかったと言えます。エサウが住んでいるセイルは約束の地の外です。一方のヤコブはカナンに住むべき者です。彼はまずベテルへ戻るべきです。ですからセイルに行くとエサウと一緒に住むようなことになってはいけません。またこれは単に場所の問題というより、信仰の問題です。

先に見たように霊的な観点からヤコブとエサウは大きく異なります。信仰に生きるのではない人と全く一つになって生活することはできません。しかしヤコブはエサウに14節で「あなた様のもと、セイルへ参ります」と言いました。そう言った後で違う方向へ進みました。これはどう考えたら良いのでしょうか。ある人はこれは遠回しの断りの言葉であって、エサウもその意味は十分汲み取っていたと考えます。だからこの後、エサウとヤコブは35章で一緒に父イサクを葬りますが、その時、このことが問題とされていない。むしろ仲良く葬ります。だから問題なかったのだと言います。確かにエサウはこのヤコブの言葉を聞いて、積極的ではないこと、むしろ辞退しようとしていることを察知した可能性はあります。しかしヤコブは「セイルへ参ります」と言った直後、反対方向のスコテへと進みました。ここに何かスッキリしないものを感じるの自然ではないでしょうか。偽りとごまかしで対処しようとした古いヤコブの性質が再びここに現れていると見るのは正当なのではないでしょうか。

もう一つクエスチョンマークがつくのは、その後の行動です。彼はスコテへ移動し、そこで自分のために家を建てました。家を建てたということは、しばらくそこに住んだことを意味します。ヤコブは本来、約束の地へ戻ったらまずベテルに向かうべきだったのではないのでしょうか。31章13節で主はこう言われました。「わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、わたしに誓願を立てた。さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい。」なのに彼はスコテに家を建ててとどまりました。確かに長旅をして来て彼の家族も家畜も休むことが必要だったかもしれません。その後、彼は18節でシェケムに移動します。シェケムとベテルはもう目と鼻の先の距離です。なのに彼はシェケムにとどまります。そしてそこに住む間に次の34章で見る娘ディナの凌辱事件が発生します。パダン・アラムから出発した時、ディナは7歳頃だったと考えられますが、その彼女が襲われたこと、また兄弟たちの状況等から考えてヤコブはスコテとシェケムに合計10年前後は住んでいたと考えられます。なぜ彼はすぐにベテルへ行かずに、こんなにも長期間寄り道したのでしょうか。これは彼の服従の不十分性を暗示するものでしょうか。このために34章の悲劇が起こったと言われても仕方のない流れとなっています。

ヤコブは兄と和解するという素晴らしい体験をした後、気が緩んでしまったのかもしれませんが。それまで重くのしかかっていた重荷を下ろし、ほっとして神に従う歩みにおいて後退してしまったのかもしれませんが。私たちはヤコブが神との格闘を通して

新しい人に生まれ変わり、あとは理想的なことばかりが続くことを期待するかもしれませんが、そうではなかったことをこれらは示しているようです。少しがっかりさせられます。これが現実の人間であるということでしょうか。そしてこれは私たち自身にも言えることなのではないでしょうか。

しかしただ落胆することだけでこの章は終わっていません。18 節にヤコブはついに約束の地に帰って来たことが言われています。シェケムに着いたことを述べる際、「カナンの地にある」とわざわざ言われています。さらにここではパダン・アラムからカナンへ直行したという言い方がされています。つまり神が約束通り、ヤコブを外国から約束の地に連れ帰らせてくださったことがはっきり語られていると考えられます。ヤコブはシェケムで天幕を張って野の一面を買いました。アブラハムが買い取ったマクペラの畑地に続いて、神の民がカナンで所有するに至った二つ目の土地です。ヤコブはここに祭壇を築き、それを「エル・エロヘ・イスラエル」、欄外に注があるように「イスラエルの神である神」と呼びました。イスラエルとは神と格闘した時にヤコブに与えられた新しい名です。彼はその神の恵みを心に刻んで礼拝しました。先に見た視点から言えば、本来ヤコブはまずベテルに直行して礼拝すべきでした。そういう意味で場所は正しくはありませんでしたが、それでも彼は礼拝しています。このようにして 33 章最後の部分は神がヤコブをついに約束の地カナンへ導いたことが述べられています。神は約束に真実な方であり、忠実な方です。ヤコブにはまだ課題があり、不十分な点があります。しかしここまで導かれた神は、これからもなお彼を教え導いて行かれます。次章で見る厳しい取り扱いを通してということなのです。

まとめとして短く二つのことを振り返って終わりとしたいと思います。まず今日の章は神がここに記された祝福を導いてくださったことを述べています。神を信じるヤコブに兄エサウとの和解を導いてくださいました。ここまでヤコブの信仰の成長を導いた上で、です。そして約束の地へ連れ帰ると言われた約束を成就されました。ヤコブをこのように導かれた恵みの神は私たちの神でもあられ、私たちをも同じように導いてくださいます。この神を仰いで感謝し、この神に信頼して従う歩みへと私たちも励まされたいと思います。

そしてもう一つはヤコブは素晴らしい経験と祝福を味わいましたが一度で全部が変わったわけではないということです。彼にはなお課題があり、古い性質が繰り返し

現れ、一気に理想的な人にはなっていません。しかしそんな彼をなお導かれる神の姿がこの後も記されて行きます。ですから私たちも理想的な人間になっていない自分を発見しても落胆し過ぎてはならないということになります。もちろんそれで良いと私は言っているわけではなく、それが人間の現実であるということです。私たちはそのことを思い、自分を誤ってとらえることなく、自分がどんなに成長したと思っても神の恵みにより頼み続ける者でなければなりません。そんな私たちにとっての慰めは神は真実であられることです。ここまで恵み深くヤコブを導かれた神は、なお彼を導いて行ってくださいます。私たちもその神に望みを置いて恵みの道をさらに前進する者たちとさせられたいと思います。ご自身の真実をもって導いてくださる神を見上げて、絶えず神の恵みにより頼み、ついには最後の救いに到達させていただく者、そしてすべての栄光と賛美をただ神に帰す神の民の歩みを導かれて行きたいと思います。